

・山崎洋教授(関西学院大学)元 IARC 研究部長、電磁波の発がんメカニズム「IARC 発ガン性評価モノグラフー超低周波電磁場に対する評価“2B”の解釈」

[日本の現状報告]

・『科学と社会を考える土曜講座』「電磁波プロジェクト」/・『NTT 墨田ビル(仮称)建設見直しを求める地域住民の会』(東京)/・福島県いわき鹿島調下蔵持区・久保1区(世帯数 241 世帯)/・中継塔問題を考える九州ネットワーク(熊本)/・北海道電磁波問題を考える会(札幌)/・滋野住民署名実行委員会(長野)/・市川市福栄地区(千葉)

また、フォーラムの前後のイベントとして、11 日の午前中には海外ゲストが両国の NTT アンテナビルの建設現場の視察をし、フォーラム後の 13 日は海外ゲストを含む約 20 人が千葉県の高圧線下で電磁波被害を受けている住宅地を訪問し、その後、議員会館で国会議員や5省庁(環境省、厚生労働省、文部科学省、経済産業省、総務省)の代表者との質疑応答や海外ゲストによる各国の電磁波問題の取り組みの報告などを行いました。

主催者の方達もこんな大がかりな国際フォーラムを開催するのは初めてのことでしたし、お手伝いをする土曜講座のメンバーたちも、ほとんどぶっつけ本番でしたが、それでもそれぞれが自分の持ち場をしっかりと守って、終わってみれば大成功！いやはや大したものでした。まるでムカデ競争を一度も練習しないまま走って、誰ひとりズッコケないで、みごとゴールまで突っ走ったみたいなの……感じでした。ムカデになった土曜講座のメンバーは、フォーラム代表(懸樋哲夫)、司会(上田昌文)、OA 機器オペレーター(西野全哉)、照明/受付(永添泰子・赤坂剛史)、書籍販売(小林一朗)、タイムキーパー(藪玲子)でした。

フォーラムでの発表として、「電磁波プロジェクト」は「東京タワーからの放送電波の強度分布と周辺地域の電磁波リスク」(発表者: 上田昌文)と「図書館の盗難防止ゲートの電磁波測定報告」(発表者: 西野全哉)を行いました。前者は今年の夏に電磁波 PJ のメンバーが東京タワー周辺の電磁波調査をした結果をまとめたもので、去年はマスコミにも取り上げられましたが、後者は今年の春から取り組んでいるもので、今回新たに注目をあび、さっそくフォーラム直後に朝日新聞で紹介されました。そのおかげである公立図書館から「職員が頭痛や吐き気を訴えるが、もしかしたら電磁波のせいではないかと思うので、一度調査に来てください」という依頼がガウスネットに来たそうで、この問題は今後も電磁波プロジェクトで調査していく予定です。

電磁波問題の専門家は日本ではとても少ないのですが、世界的にみてもまだまだ少ないのが現状のようです。たとえば今回参加して下さったリビー・ケリーさん(米)とニール・チェリー

さん(ニュージーランド)は4月にもアメリカの国際会議で会い、今回の日本での国際フォーラムの直後にはアン・シルクさん(英)とリビー・チェリーさん(米)がロンドンでの国際会議で会うということでした。「電磁波プロジェクト」も市民研究グループとして、市民活動家として、これからも世界の専門家たちと情報交換し、さまざまな形で連帯してゆけたらいいなと思っています。■

プロジェクト報告 科学技術評価プロジェクト 産業技術政策に焦点をあてて

科学技術評価プロジェクトリーダー 藤田康元

前回の報告からこの間に行った活動は、3月31日から4月1日の合宿のみです。

場所は PJ メンバーである尾内さんのお宅をお借りした参加者は尾内さん、上田さん、藤田、他1名でした。合宿でやったことをまとめると以下の三つです。

(1) 最近の半導体産業と旧国立研究所の動向について報告と議論。(3/20『朝日新聞』朝刊記事「半導体開発へ5社連合 NEC・東芝・富士通・日立・三菱 次世代の規格統一 国支援で新会社」等を参照)

(2) わたしたちの PJ を今後どうすすめるかの議論。特に国のプロジェクトである「量子化機能素子の研究開発」を今後どう扱うかについて、以下の点を確認。

・国の具体的なプロジェクトを対象にできるだけ焦点の定まったことをやる。

・とりあえず「量子化機能素子」に関してできることをちゃんとやる。

・将来的には別の対象にも取り組みたい。

(3) 日本の産業(技術)政策に関わる文献の学習と議論。

とりあげた文献: ダニエル・沖本『通産省とハイテク産業』、リチャード・J・サミュエルズ『富国強兵 技術戦略にみる日本の総合安全保障』、山田敦『ネオ・テクノナショナリズム グローバル時代の技術と国際関係』

今後すぐにできる作業として以下の二つを決めました。

(1) 量子化機能素子の研究開発の評価に関して『中間評価報告書』『プレ最終評価報告書』『最終報告書(案)』の「評価」の章の記述を互いに比較して気になる点を拾い出す。

(2) 進藤宗幸『技術官僚』(岩波新書)を読んで生かせる点を指摘する。

また、今後参照したい文献として次のような著書があがりました。

★中岡哲郎ほか『戦後日本の技術形成 模倣か創造か』(日本評論社)/★新藤宗幸『講義 現代日本の行政』(東大出版会)/★西川伸一『官僚技官 霞ヶ関の隠れたパワー』(五月書

房 1600 円)

残りの字数を使って、合宿でとりあげた三冊の本の簡単な紹介をしたいと思います。

『通産省とハイテク産業』は、通産省の産業政策の有効性を説明する中心的要因として、通産省そのものではなく、その活動の場である日本の複雑な体制全体に目を向けたものです。具体的には半導体産業を取り上げています。かつて影響力を持った「日本株式会社論」やチャルマーズ・ジョンソン『通産省と日本の奇蹟』の議論(通産省の産業政策をそのものを重視する)などの批判になっているといえます。合宿では尾内さんが手際よく解説してくれました。

私が紹介した残りの2冊について。『富国強兵の遺産』は、その副題が示す通り、日本政府の技術政策に日本独自の安全保障の考え方を読み取った研究です。著者は、外国の技術を習得して「国産化」し、それを国内産業に「普及」し、国内企業を「育成」という三原則を日本のテクノナショナリズムの中核として分析しています。主として航空機産業を扱っています。『ネオ・テクノ・ナショナリズム』は、グローバリゼーションの進行によって国家は衰退に向かっているのか、それとも、健在なままなのか、という問いを基底にして、ここ数十年の技術と国際関係(具体的には日米の半導体政策)を分析したものです。著者はまず、現状は技術が広い地域に拡散しそこで統合されるグローバリゼーションのプロセスだけではなく、技術が狭い地域に集積し地域間の違いが際立ってゆくローカリゼーションのプロセスも同時進行しているとし、「グローカリゼーション」と捉えるべきだとします。そして、国家の技術政策は「グローカリゼーション」の波を利用した「ネオ・テクノ・ナショナリズム」へと向かっていると主張します。つまり、国家の役割は変容しているとはいえ、決して衰退してなどいないというわけです。

以上の三冊はともに大学の、しかもみな政治学の分野の学者の著作ですが、私たちのPJにとって重要な背景知識を与えてくれるものとしてとりあげました。今後も科学技術政策に関わる生の一次資料を主たる分析の対象としながら、時にはこうした2次文献も学習・議論の対象にとりあげてゆく予定です。しかしこれはもちろん補助的な作業です。メンバーが全員通読する必要もないとしてやっています。難しい「お勉強」の会となつては、まずいので。■

藤田康元プロフィール

丙午生まれの年男。大学院で科学史の勉強を長らくしている。最近是非常勤講師として教えたりもする。目下の研究テーマは日本の宇宙開発史。ポルノ・買春に批判的な立場から男性運動にも関わる。「ゆうメイト」という名の非正規郵政労働者でもある。趣味は寝ることと散歩。一応プロジェクト・リーダーです。■

第19回 湘南科学史懇話会 & 第137回土曜講座

「日本の戦後民主主義とアメリカ」に参加して

アジアの人々と信頼関係を築くために

西野全哉

第二次世界大戦が終了するまでは、日本人のほぼ全てが戦って死ぬことを覚悟し、敗戦が知らされると涙を流し、天皇陛下に対し申し訳無いと思った。そして、「一億総懺悔」をした。あまりにも無知だと思われるかもしれないが、これが、私がなんとなく抱く戦中と戦後のイメージである。日本人全員がこのように考えていたのは異常なことだと思っていた。しかし、極度の思想統制によって日本がカルト的な宗教団体のようになっていたのだから仕方がなかったのだと勝手に理解していた。日本の歴史教育が悪いのか、まじめに聞いていなかった自分が悪いのかは分からないが、実際に私が持っていた知識はその程度であった。ちなみに、私の大学の友達にはこの程度しか知識を持っていない人が多いのではないと思う。

そのような状態だったから、当然、2月の土曜講座「日本の戦後民主主義とアメリカ」に気軽な気持ちで参加した時には、知識もなく本も読んでいない自分が場違いなところに来てしまったことを感じた。正直なところ、最初は少し後悔した。それでも、分からないなりに話を聞かせていただいていると、「現実は今までの自分の認識とかなり違うらしい」という印象を受けた。言われてみれば当たり前なことではあったが、敗戦の受け止め方は人それぞれであったらしいということだった。そして、この本はぜひ読んでみなければと感じた。

読んでみてまず驚いたのは、歴史関連の本を読むと長続きしない自分が引き込まれるように読み進められたことである。上下巻合わせて800ページほどあるのに読みやすいため「気合を入れて読む」必要はなかった。読み進めていくうちに、自分の頭の中で、自衛隊と憲法の整合性・官僚機構など現在の日本が抱える問題と戦後の政策がつながっていくのは非常に興味深かった。そして、中学生くらいのころに疑問であった「なんで、天皇は戦争の責任を取らなかったの？」ということに対しては、その決定が日米の周到な協同作業の結果であったことに驚いた。

憲法については改憲の必要性を口にする人がいるが、そういう人達が持ち出す理由に「押し付けられた憲法だから」がある。「押し付けられた」という点では、決して間違っていないと思う。しかし、それだからといって直ちに改憲すればよいものではないと思う。国際状況が当時とは変わっていることは分